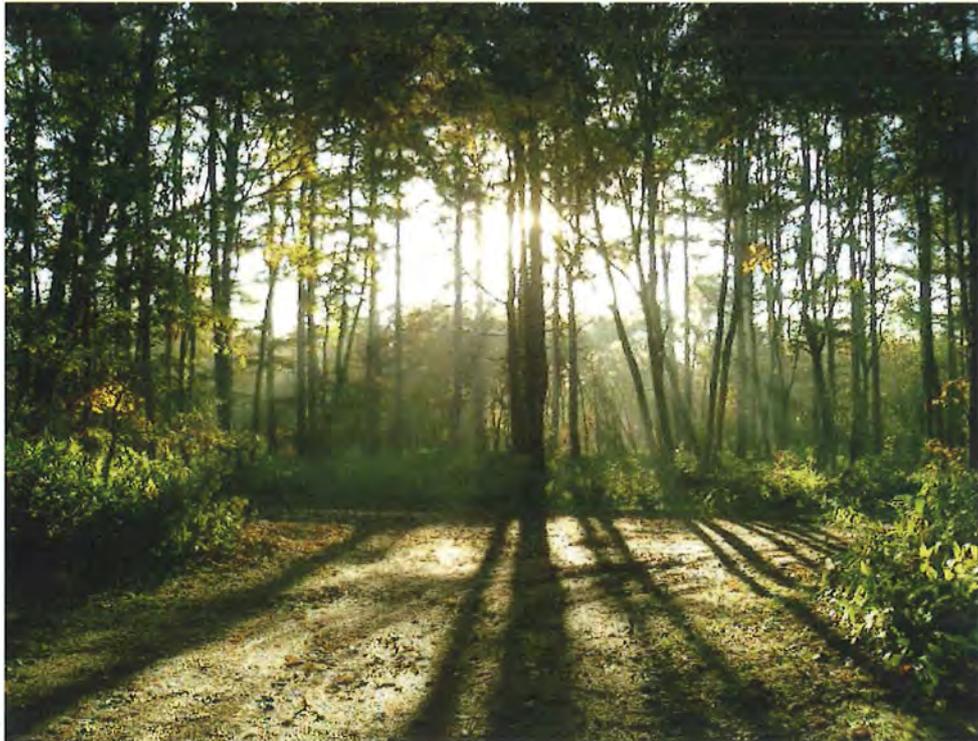


里山とフラジリティ

文・写真◎草薙 健



朝の木漏れ日。たかがいつもの光線、
しかしこちらの感性は躍動する

くさかり たけし

1951年山形市生まれ。75年北大農学部卒業。76年から苫東工業基地で緑地の保全、緩衝緑地づくり、景観形成に携わる。98年から(財)北海道開発協会勤務。webで「雑木林&庭づくり研究室」を主宰、「北の森林と健康ネットワーク」副理事長。技術士(環境部門)。

厚真の里山

苫小牧と厚真の境界にある500haほどの雑木林を主体とした苫東の緑地は、わたしにとって最も身近な里山である。もとは薪炭林であり牛や馬の放牧をしていたともいう樹齢が50年前後の林である。森林調査簿を見ると昭和20年代以降に皆伐され天然更新した場所が多く、わたしが勤めた昭和51年はまだ若い丈の低い木が混んだ林だった。平成7年ごろ、そこに厚真町産のカラマツを素材とした小さなログハウスが建った。雑木林の手入れを始めるに当たってその拠点にするためだった。

一帯の東隣は米どころ厚真の水田であり、そこには農家が散在し、遠景として見る山辺景観も実に整然として美しい。しかし、その農地と林地の所有地の境界は個人と法人の厳然たる所有界であり、相互の行き来は今全くない。明治の後期(20年ごろ)の入植以来、「落ち葉を漉き取って田畑に入れる習慣はなかったようだ」と地元の人七十代の人は語り、「牛馬の堆肥がまもなく化学肥料に代わって、林は薪炭と林内放牧の場だった」と言う。確かに人里の位置にはあるが、本州のような里山的利用はなかったために、北海道には厳密な意味の里山はないと考えられて、そのために「里山的」といってみたり「北の里山」と呼ぶことがある。

林のケア

この広大な雑木林は、北海道で大変珍しいことにコナラが中心である。勇払川を渡った西側、北大苫小牧研究林などはもうミズナラの世界である。コナラが中心か、ミズナラなのかで林の景観は実は大分違う。里山のなのはどちらかと言えば女性的で小振りなコナラの方であろう。この優雅とも見えるコナラの雑木林に作業用のログハウスができて一変したことがある。それは、のっぺらぼうの林に「依り代」が生まれて、いつのまにか里山的になってきたのである。「依り代」があると、そこに人は集い、時には寝起きもするようになる。つかの間の山の暮らしのために木を切り、薪を積むようにもなる。作業の人や視察者などを焚き火でもてなし、小屋周りばかりでなく、フットパスも林道もと、手入れのエリアをやや拡大気味に広げ伸び盛る雑草を刈り払っていく、そんな営みが常態化するのだ。この常態化する営みが、糸井重里のいう「手自然」を作り、その手自然がもっとも里山的なものの特長の一つになる。里山は人の関わりが風景に結晶する場だ。

活かすこと、活かされること

里山のもう一つの特長、それは言うまでもなく生き物の多様性である。だが、里山が手入れをした途端、様変わりするその変化を実感したことがあるだろうか。見た目にはその秋にまず紅葉が



手入れの産物は、しばしば小屋などの薪になる。やがて薪ストーブを囲んで時間を過ごすことが目的化する



里山の手入れの産物。伐ってここまで集積するのは実は想像を絶する重労働である

見違えるように美しくなる。そして昆虫層のバラエティーがぐんと増える。明るさ、温度、湿度において微妙にグラデーションができていろいろなものが生きられる隙間ができるのだろう。また、里山にはオオタカやクマガイが棲む。ヒグマの太い糞が林道の真ん中に落ちていたこともある。エゾシカはピーッとよく鳴く。小屋の窓には薪の上に登って小屋の内部を覗いたアライグマのような泥の足形がついていたことがある。エゾモモンガの記録もあるし、ピザ竈のなかにはいつの間にかコウモリが棲んでいた。積雪期はこんなにウサギが多かったのかと驚く。先日は、ペランダで本を読んでいたら、背中丸太でアオダイショウと一緒にひなたぼっこをして逃げない。何年前か、このアオダイショウが小屋の主のようになってから、それまで置き忘れたリングなどをかじっていたトガリネズミがいなくなった。春と秋、小屋に寝ていると、早朝、落ち穂拾いのためウトナイ湖を発って厚真や鶴川の水田に向かうマガン・ヒシクイの一群が、鳴きながら上空を飛び交うので目を覚ます。里山の春夏秋冬、24時間は、ここがさまざまな生き物の宝庫、動植物のミュージアムだということを余すところなく見せる。

フラジリティと民話

そんな里山で過ごす時間が長くなると、自分がさまざまな生き物のなかにぽつんと居る、一個の生き物でしかない、ということに気づく。動物の

一種ではあるけれども、樹木たちも含めた単なる命ある生き物の一つ。そのかそけき存在。壊れやすいガラスなどに使う「fragile」(フラジヤイル)のようなものだと思えてくるのである。きつと、雑木林が情緒に訴えかけるのか、メソメソする弱い人間なんだ、それでもいいんだ、と妙に素直になれるのである。壊れやすい存在、フラジリテイの認識。おもえば奇妙な感覚である。こういう感覚を里山で得ることができたのは、恐らく多様な生き物と出会うということだけでなく、生き物たちの死とも出会うことと関係が深い。先日はベランダで初めてヨタカの骸をみた。弔おうとして持ち上げると、内蔵部分は大小のウジがきれいに消化したあとで、ぼろぼろと大量のウジが落ちた。山仕事のつど実に危ない目にあい、死に直面したりすることも伏線にあるようだ。そうしたとき、人は仕方なくなのか素直になのか、ともかく謙虚になるのが常のようだ。ただ里山にいるというだけでなく、里山的に営みを持って初めて見えてくる里山とは、エコロジーを越えたかなり民話的な世界である。

里山はアジール

わたしは中沢新一の著作でドイツ語の *asyl* (アジール) という言葉を知り、それ以来、妙に惹かれるようになった。アジールとは罪を犯して追われる人が逃げ込むような場所で、権力が及んでこない空間である。赤十字の概念に通ずるものと



厚真の里山。広葉樹の里山は農地からゆるやかに標高を上げる



初冬の里山はさっぱりと明るくなって四季で最も美しいかもしれない。緑色はもうないが、実に「緑的」だ

も言われ、俗界を切り離された聖域として安全を保証され、いわば人間の弱さ(フラジリテイ)を丸ごと受け入れてくれる場とも言える。太陽がさんさんと輝く田園からみると、里山の中は、陽光のじりじり照りつける光線から逃れ、どこか緊張がほぐれる。ホッとするような感覚は、どこか隠れ家に逃げ込んだ雰囲気はないだろうか。都市公園のような、入り口から出口までデザインされた人工の匂いがなく、どこか暮れなずむたそがれの匂いがこもる。

多様な生き物が投げ所にし、人にもっとも身近な里山。その里山は今、手入れ不足で生き物の棲める空間としてのキャパシティをせばめ、それどころか、風景としては人を招き入れないケガレチのような風貌に変わった。当然のように、里山の境界の山辺はしばしばゴミ捨て場になる。里山の多様性を期待するだけでなく、もっと幅広い新しい意味を見直そうと、手自然を呼び戻す担い手を、今の里山は求めているように思う。そこに初めて人々の居場所が見つかる。